

### 3-48 「第四八章 三位一体的定式」

エンゲルスは、『資本論』第三部の「序文」で次のように述べています。

「最後に第七篇は完全に書き上げられてはいたが、ただ最初の草案でしかなく、印刷のできるものにするためには、まずその果てしなくもつれあったいくつもの章句を分解しなければならなかった。」

第七篇の「最後の章ははじめのほうがあるだけである。ここでは、地代、利潤、労賃という三つの大きな収入形態に対応する発展した資本主義社会の三つの大きな階級——土地所有者、資本家、賃金労働者——と、それらの存在とともに必然的に与えられている階級闘争とが、資本主義時代の事実上現存する結果として示されるはずだった。このような最後の総括をマルクスは印刷直前の最後の改訂のために保留しておくのが常だったが、その場合には最新の歴史的な諸事件がいつもまちがいなくきまって彼の理論的展開の例証を最も望ましい現実性において提供したのである。」と。

「最後の章」が書けなかったこと、マルクスにとって本当に残念なことでしたでしょう。これらを踏まえ、第七篇の「第四八章 三位一体的定式」以下を見ていきましょう。

#### 「第四八章」の主な抜粋と若干の補足

※「抜粋」文に「番号」と「タイトル」の付いている文章は、ホームページ5「温故知新」  
「1、マルクス・エンゲルスの大事な発見」のマルクス・エンゲルスの著作の抜粋ページ「A」から「J」で紹介してある文章です。

#### P1043

「資本——利潤(企業者利得・プラス・利子)、土地——地代、労働——労賃、これは、社会的生産過程のあらゆる秘密を包括している三位一体的形態である。」

続けて、資本、土地、労働の役割・機能に論及している。

#### P1047 (8-17 俗流経済学の役割 PDF有り)

「俗流経済学は、ブルジョア的生産関係にとらわれたこの生産の当事者たちの諸観念を教義的に通訳し体系化し弁護論化することのほかには、実際にはなにもしないのである。だから、経済的諸関係の疎外された現象形態、そこではこの諸関係が一見してばかげたものであり完全な矛盾であるような現象形態——そしてもし事物の現象形態と本質とが直接に一致するものならばおよそ科学は余計なものであろう——、まさにこのような現象形態のもとでこそ俗流経済学はまったくわが家にある思いがするのだとしても、そしてまたこの諸関係の内的関連がおおい隠されていればいるほど、といってもこの諸関係が通常の観念にとってはなじみやすくなっていけばいるほど、ますますそれは俗流経済学にとって自明に見えるとしても、そんなことはわれわれにとっては驚くにはあたらないのである。」

(大月版⑤ P1047B8-2)

資本家は「土地という使用価値」と「資本という使用価値」と「労働という使用価値」を使って利潤を生み出す。(P1058「地代と利潤と労賃とは、土地と生産された生産手段と労働とが単純な生産過程で演ずる役割から生まれてくるように見えるのであって、われわれがこの労働過程を単に人間と自然とのあいだに行なわれるものとしてどんな歴史的規定性からも離れて見るかぎりでも、そう見えるのである。」)

## P1050-1051 〈25-11 “自由の国” と “必然性の国” 〉

「……。しかしまた、一定の時間に、したがってまた一定の剰余労働時間に、どれだけの使用価値が生産されるかは、労働の生産性によって定まる。だから、社会の現実の富も、社会の再生産過程の不断の拡張の可能性も、剰余労働の長さにかかっているのではなく、その生産性にかかっており、それが行なわれるための生産条件が豊富であるか貧弱であるかにかかっているのである。じっさい、自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに、はじめて始まるのである。つまり、それは、当然のこととして、本来の物質的生産の領域のかなたにあるのである。未開人は、自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないが、同じように文明人もそうしなければならないのであり、しかもどんな社会形態のなかでも、考えられるかぎりのどんな生産様式のもとでも、そうしなければならないのである。彼の発達につれて、この自然必然性の国は拡大される。とういのは、欲望が拡大されるからである。しかしまた同時に、この欲望を充たす生産力も拡大される。自由はこの領域のなかではただ次のことにありうるだけである。すなわち、社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行うということである。しかし、これはやはりまだ必然性の国である。この国のかなたで、自己目的として認められる人間の力の発展が、真の自由の国が、始まるのであるが、しかし、それはただかの必然性の国をその基礎としてその上のみ花を開くことができるのである。労働日の短縮こそは根本条件である。」(大月版⑤ P1050-1051) (注)いわゆる「社会主義社会」も必然の国です。

ここで述べられていることを簡単にまとめると次のようになります。

- ①一定の時間に、どれだけの使用価値が生産されるかは、労働の生産性によってきまる。だから、社会の富の増加も、社会の再生産過程の不断の拡張の可能性も、その生産性を保障する生産条件が豊富であるか貧弱であるかにかかっている。
- ②ここで言う、「自由の国」は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに、はじめて始まる。
- ③未開人も文明人も、どんな社会形態のなかでもどんな生産様式のもとでも、自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならない。
- ④この自然「必然性の国」での「自由」とは、資本主義社会から「社会主義社会」になることによって、社会化された人間、結合された生産者たちが、資本の盲目的な力によって支配されるのをやめ、自分たちと自然との物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くことができるようになることである。
- ⑤しかし、資本主義社会から「社会主義社会」になること、これはやはりまだ「必然性の国」である。
- ⑥この「必然性の国」である「社会主義社会」をその基礎として、この「必然性の国」の先に、自己目的として認められる人間の力の発展が万人に保障される、真の「自由の国」が始まることができるのである。
- ⑦「社会主義社会」が資本主義的生産様式の持つ生産性向上の壁を打ち破って、「自分た

ちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとで」生産性を保障する生産条件を豊富にすることによって、労働の生産性の飛躍的向上をはかり、労働日を短縮することこそが「自由の国」実現のための根本条件である。

もう一つ、要約したものを紹介します。

「物(富)がどれだけ生産されるかは生産性の高さにかかっており、生産設備等の進歩にかかっている。『自由の国』は強制されてはたらく必要がなくなったときに、はじめて始まる。つまり、それは、当然のこととして、遠い将来のことである。未開人も文明人も自然と格闘しなければならない。この『自然必然の国』は社会の発展につれて拡大する。この『自然必然の国』での『自由』とは、盲目的な力に支配されていた生産が計画的、意識的におこなわれるようになり、共同的統制のもとに置かれることである。しかし、この『自由』を獲得した『**社会主義社会**』もまだ『必然性の国』である。この国のかなたで、強制的な労働のない、自分の人間的な能力の発展のみを追求する真の『自由の国』が始まる。しかし、それは、『**社会主義社会**』という『必然性の国』を基礎として、その上でのみ花開くことができる。そのための根本条件は労働日の短縮、つまり、生産性の向上である。」

これがマルクスが『資本論』で述べていることです。

エンゲルスも『空想から科学へ』（新日本文庫）のP72と75で、『資本論』のこの部分よりも1ページ先の部分を含めて基本的に同じ内容を述べています。ただし、エンゲルスは、ここでは、「必然の王国から自由の王国への人間の飛躍」の時期である「**社会主義社会**」までを述べ、「自由の王国」の内容については述べていませんが、P71で「自由の王国」の内容について、「ただ物質的に十分にみち足りており、日に日にますます豊かになっていくだけでなく、肉体的、精神的素質の完全で自由な育成と活動を保障するような生活を、社会的生産によってすべての社会の成員にたいして確保する」と述べています。

そして、マルクスは『ゴータ綱領批判』（岩波文庫P38）で、「共産主義社会のより高度の段階において、すなわち諸個人が分業に隷属的に従属することがなくなり、それとともに精神的労働と肉体的労働との対立もなくなったのち、また、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、生活にとってまっさきに必要となったのち、また、諸個人の全面的な発展につれてかれらの生産諸力も成長し、協同組合的な富がそのすべての泉から溢れるばかりに湧きでるようになったのち——そのときはじめて、ブルジョア的権利の狭い地平は完全に踏みこえられ、そして社会はその旗にこう書くことができる。各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて！」と述べています。

不破さんは、「人間生活の物質的存在条件」の資本主義的生産関係の変革を「夢がない」といい、「古い革命観」だと言って否定し、そのことなしには実現しない「自由の国」を資本主義社会にもある「余暇」である「自由な時間」に置き換え、これがマルクスの「未来社会論」だと吹聴しています。

#### P1052-1053 〈15-22 必要労働とは〉

「必要労働とは、この労働力の維持と再生産のために必要な労働であって、この維持や再生産の条件がより貧弱であろうとより豊富であろうと、より有利であろうとより不利であろうと、その必要なことに変わりはないのである。」（大月版⑤ P1052-1053）

#### P1060

「労働のすべての社会的生産力が、労働そのものではなく資本に属する力として、資本

自身の胎内から生まれる力として、現れる」ので、「資本はすでに非常に神秘的なものになる。」

直接的生産過程と流通過程の分離によって、流通過程での価値実現の独立化によって、利潤の源泉は見えにくくなる。同時に、P1061「利潤が平均利潤に転化し、価値が生産価格に、すなわち市場価格の規制的平均に転化すれば、なおさらそれ（「剰余価値の真の性質を、したがってまた資本の現実の機構を、ますますおおい隠してしまう」こと——青山）はひどくなる。……ただそう見えるだけでなく、ここでは実際に商品の平均価格はその商品の価値つまりその商品に実現されている労働とは違っているのであり、また、一つの個別資本の平均利潤は、この資本が使用する労働者から引き出した剰余価値とは違っているのである。」

#### P1062

「資本が最初は、流通の表面では、資本呪物として、価値を生む価値として、現れたとすれば、それが今ではまた利子生み資本という姿でその最も疎外された最も独特な形態にあるものとして現れるのである。……利潤ではやはりまだその起源を思わせるものが残っているが、それが利子ではただ消えてしまっているだけでなく、この起源にたいする固定した対立形態に置かれているからである。」

#### P1063-1065 〈9-4 魔法にかけられ転倒され逆立ちした世界、古典派ブルジョア経済学の功績と限界、俗流経済学と経済的三位一体と支配的諸階級の階級的利益 重要!!〉

「資本—利潤、またはより適切には資本—利子、土地—地代、労働—労賃では、すなわち価値および富一般の諸成分とその諸源泉との関係としてのこの経済的三位一体では、資本主義的生産様式の神秘化、社会的諸関係の物化、物質的生産諸関係とその歴史的社会的規定性との直接的合生が完成されている。それは魔法にかけられ転倒され逆立ちした世界であって、そこではムッシュー・ル・カピタルとマダム・ラ・テル〔資本氏と土地夫人〕が社会的な登場人物として、また同時に直接にはただの物として、怪しい振舞をするのである。このようなまちがった外観と偽瞞、このような、富のいろいろな社会的要素の相互間の独立化と骨化、このような、物の人格化と生産関係の物化、このような日常生活の宗教、およそこのようなものを解消させたということは、古典派経済学の大きな功績である。というのは、古典派経済学は、利子を利潤の一部に還元し、地代を平均利潤を超える超過分に還元して、この両方が剰余価値で落ち合うようにしているからであり、また、流通過程を諸形態の単なる変態として示し、そして最後に直接的生産過程で商品の価値と剰余価値とを労働に還元しているからである。それにもかかわらず、古典派経済学の代弁者たちの最良のものでさえも、ブルジョアの立場からはやむをえないことながら、自分たちが批判的に解消させた外観の世界にやはりまだ多かれ少なかれとらわれており、したがって、みな多かれ少なかれ不徹底や中途はんばや解決できない矛盾におちいつている。これにたいして、他方では、現実の生産当事者たちがこの資本—利子、土地—地代、労働—労賃という疎外された不合理な形態ではまったくわが家にいるような心安さをおぼえるのも、やはり当然のことである。なぜならば、まさにこれこそは、彼らがそのなかで動きまわっており毎日かわりあっている外観の姿なのだからである。したがってまた、同様に当然なこととして、俗流経済学、すなわち、現実の生産当事者たちの日常観念の教師的な多かれ少なかれ教義的な翻訳以外のなにものでもなくて、これらの観念のうちにくらか条理の

ありそうな秩序をもちこんでくる俗流経済学は、まさにこの、いっさいの内的関連の消し去られている三位一体のうちに、自分の浅はかな尊大さの自然的な、いっさいの疑惑を越えた基礎を見いだすのである。この定式は同時に支配的諸階級の利益にも一致している。なぜならば、それは支配的諸階級の収入源泉の自然必然性と永遠の正当化理由とを宣言してそれを一つの教条にまで高めるものだからである。

生産関係の物化の叙述や生産関係の独立化の叙述では、われわれは、……立ち入らない。なぜ立ち入らないかといえば、競争の現実の運動はわれわれの計画の範囲外にあるものであって、われわれはただ資本主義的生産様式の内的編制を、いわばその理想的平均において、示しさえすればよいのだからである。

以前のいろいろな社会形態では、この経済的神秘化は、ただ、おもに貨幣と利子生み資本とに関連してはいつてくるだけである。それは次のような場合には当然排除されている。第一には、使用価値のための、直接的自己需要のための、生産が優勢な場合である。第二には、古代や中世でのように奴隷制や農奴制が社会的生産の広い基礎をなしている場合である。この場合には生産者にたいする生産条件の支配は、支配・隷属関係によって隠されていて、この支配・隷属関係が生産過程の直接的発条として現れており、目に見えている。自然発生的な共産主義が行われている原始的共同体のなかでは、また古代の都市共同体のなかでさえも、その諸条件を含めてのこの共同体そのものが生産の基礎として現われ、また共同体の再生産が生産の最終目的として現われる。中世の同職組合制度にあってさえも、資本も労働も無拘束なものとしては現われなくて、それらの相互の関係は、組合制度やそれと関連する諸関係やまたこの諸関係に対応する職業上の義務や親方資格などの諸観念によって規定されたものとして現われる。資本主義的生産様式においてはじめて（ここで原稿は中断している。）『資本論』第3巻 第2分冊『資本論』⑤ P1063F8-1065B1)

中断以下の内容について、青山は次のように推測する。「①資本主義的生産様式においてはじめて経済的三位一体が完成したこと。②資本主義的生産様式においてはじめて資本も労働も社会から無拘束なものとしては現われたこと。③その結果、資本主義的生産様式は(資本主義)社会そのものを掘り崩す矛盾を抱えていること。」そして、グローバル資本主義のもとで、われわれは、産業の空洞化によって、日本社会そのものの存亡の危機に直面していることを強く意識するのである。しかし、不破さんの主張の息の根を止めるためにも、ここで原稿が中断されているのが残念です。(上記の文章は、ホームページ「温故知新」→「1 マルクス・エンゲルスの大事な発見」→「C、資本主義社会 I」の「9、資本主義社会での事物の認識」の「9-4」にあります。)

#### 「第四八章」の「経済的三位一体」の意味と今日の私たちの留意点

これらを通じて、ここで『資本論』が訴えていることは、おおむね以下のとおりです。

①「三位一体的定式」による資本主義的生産様式の「神秘化」にごまかされてはいけないということ。「三位一体的定式」とは「まちがった外観と偽瞞」の表現であり、支配的諸階級の階級的利益に一致している認識である。だから、不破さんのように「資本主義社会を支配する神秘化の極致を表現した」などと述べるだけで、「三位一体的定式」の「まちがった外観と偽瞞」の暴露の必要性・重要性を「解説」しないのは正しくありません。

②俗流経済学は、「現実の生産当事者たちの日常観念の教師的な多かれ少なかれ教義的な

翻訳以外のなにものでもなく、「いっさいの内的関連の消し去られている三位一体のうちに、自分の浅はかな尊大さの自然的な、いっさいの疑惑を越えた基礎を見いだす」ものであり、だから、「この定式は同時に支配的諸階級の利益にも一致している」ことを述べ、「俗流経済学」を徹底的に暴露する必要性を『資本論』は示唆している。だから、不破さんのように、「ブルジョア経済学の両派にたいする的確な特徴づけがおこなわれています」などと呑気なことを言っている場合ではなく、「俗流経済学」の存在意義を正しく認識して、今日の、資本が「国家」を捨て、我が物顔で振る舞っているグローバル資本主義を弁護する「俗流経済学」を徹底的に批判しなければなりません。

③資本主義的生産様式においてはじめて、資本も労働も社会から無拘束なものとして現われ、あからさまな暴力による支配から「経済的神秘化」による「まちがった外観と偽瞞」による支配が完成した。その結果、資本主義的生産様式は(資本主義)社会そのものを掘り崩す矛盾を抱えこんでしまったが、それはそれでまた、新しい国民の共同社会への途を開く準備となるということ私たちに教えている。だから、今日の日本を変えるためには、現在の状況のわずかな改善の要求だけに留まることなく、新しい国民の共同社会への展望を示すことが科学的社会主義の思想の必然であり義務であることを『資本論』は示唆しています。

「資本主義的生産様式においてはじめて資本も労働も社会から無拘束なもの」となり、自由に行動する資本のグローバルな活動により産業の空洞化が進み、われわれは今、日本社会そのものの存亡の危機に直面しています。私たちは、『資本論』の「第四八章 三位一体的定式」を読むに当たって、このように、現在の日本を頭の真ん中に置いて読むことが求められていると思います。